

20230824 「異常気象がニューノーマルに」

この夏は、例年になく暑さでした。夏休み中の校庭開放は、ほぼ全日暑さのため中止でした。

8月17日付のNewsweekでは、

＜補足資料この7月は、観測史上地球が最も暑い月になった。なかで最も暑かったのは、南北アメリカ、北アフリカ、南極半島だ。本誌も報じたとおり、その南極は270万年に一度の特異現象に襲われている。行動にはもう遅すぎるのか＞

との見出しで、警鐘を鳴らしています。

気温が上がれば、干ばつは一層悪化し、山火事が発生します。それも今月ハワイやカナダで見られたような最悪レベルの山火事です。

こうした事態に対して、国連のグテーレス事務総長は、

「地球温暖化の時代は終わった。地球沸騰化の時代が到来した。」

「異常気象がニューノーマルになりつつある」

と、各国に気候変動対策の強化を求めました。

「沸騰化」とは穏やかではないと感じつつ、「ニューノーマル」について考えました。少し前まで「ニューノーマル」とは、大まかにコロナ禍における新しい生活様式のことを指していました。グテーレス事務総長の言う「ニューノーマル」とは、それとは全く異質で深刻です。そもそも「異常気象」とは、何に対して異常なのかというと、これまで私たちが「まあ当たり前」と感じていた感覚、5年前や10年前までの感覚と比べて「異常」だということだと思います。「暑い夏もある、でもそんな年ばかりではない、涼しい夏もある。気候というものはある程度幅を持って移り変わっていくものだ・・・」これが、これまでの「ノーマル」でした。しかし、こんな暑い夏、干ばつ、山火事、台風を始めとする極端な風水害、・・・これらが、これからの「ノーマル」だ、これまでの経験則では考えられない今年のような夏がこれからは「ノーマル」だ、ということなのでしょう。そして、一昨年より昨年、昨年より今年、今年より・・・と、次第に悪化していく地球規模の気候と大規模化・深刻化していく災害、この悪化の上昇曲線も「ノーマル」だ、ということなのでしょう。もう、後戻りはありません。もう、かつてのような「納涼」という風情は見られなくなるのでしょうか。

今の生活やインフラがこの先何年保証されるというのか、今のインフラも各制度もこれまでの「ノーマル」を前提に考えられているとしたら、どこに持続可能なものがあるのか、不安は尽きません。それでも、これまで通りを続けますか？ということなのだと思います。明日も、一年後も、3年後も、今と同じことを続けるのか？変えるとしたら、何をどう変えるのか、・・・後戻りはしないこの世界の中で。

そんなことを言ったって、私たち一人一人がどう頑張ってもたかが知れていると、半ばあきらめてしまいたくなる気持ちが起きてくるかも知れません。確かに、国家レベ

ルでの対応策は必須です。しかし、気候変動に私たち一人一人の生活が無縁であるはずはありません。それどころか、熱帯雨林の伐採、生物多様性の喪失、海や陸の汚染、人権に関わる不当労働・児童労働・不当差別、これらは皆、私たちの日常としっかり結びついています。ただし、そのことは実に巧妙に見えなくなっていて、気づきにくくなっています。何が問題で、何をポイントとして捉え、行動していけばいいのか、気づきと思考と行動についての学びが、これからの教育でさらに重要になってくると考えます。問題に対して、対話的・協働的に考え、多くと連携してさらに協働的に行動していく学びが大切です。そして、その底流に「人を理解し大切にする」「自分を大切にする」「ものを大切にする（もったいない）」「みんなの場所を大切にする」「自然や環境を大切にする」「力を合わせる大切さと喜びを知る」「考え、学び、より賢く生きようとする」「平和を愛し守ろうとする」・・・こうした生きる上での姿勢を育てることが、最も重要です。ですから、この学びは、あらゆる発達段階を通じて適切に確実にすすめる必要があると思います。本校も校内研を軸に、特別活動、各教科教育、生活指導、行事を通してその確かな推進をすすめてまいりましょう。